研究論文

石田殿の立地について

本 中 真*

On the Views from Ishida-dono; the Villa Residence Constructed in 11th C.

Makoto MOTONAKA

摘要: 11世紀に造営された石田殿は、眺望景観がすぐれているが故に、当時の作庭第一人者である橋俊綱によって絶賛された別業である。この小論では、従来挙げられてきた石田殿の比定地の検証を行うと同時に、史料と景観の側面から琵琶湖西岸、園城寺北郊に存在した可能性が極めて高いことを指摘した。

1. はじめに

石田殿は、11世紀後半に造営され、当代随一と絶賛された別業である。それは『今鏡』（「ふちなみの上」）の中の、白河上皇と修理大夫橋俊綱の、建物・庭園をも含めた「別業論」とでもいうべき有名な次の会話によって知ることができる。

「白河の院。いちのをもしろき所はいづこかある。とはせたまひければ。一にはいしだこそ侍れ。次にはとおほせられければ。高陽院ぞさぶらふらんと申に。第三にはとばありなんやとおほせられければ。鳥羽殿は君のかくしなさせ給たればこそ侍れ。地形眺望などいとなき所なり。第三には俊綱がふしみなどやさぶらふらんとぞ申されける。こと人ならばいと申にくきことなりかし。高陽院にはあらで平等院と申人もあり。」¹⁾

みられるように、白河上皇の「建物・庭園の構えが優れた邸宅はどこか」という質問に対して、俊綱は第一に石田殿を挙げている。その理由は、石田殿が地形や眺望に極めて優れていたからである。

石田殿に関する事項は、他にもわずかながら文献中に認められるが、いずれも断片にすぎない。従って、従来の研究では、その位置はもとより、建物、庭園の規模、意匠について示す確実な資料が不足しているという点で、「幻の館」として扱われて来た感がある。しかし、地形が優れ、眺望に恵まれていたということは、この時期の庭園における眺望行為の特性を明らかにするうえで、石田殿は重要な鍵を握っており、避けて通ることのできない分析事例である。そこでこの小論では、筆者なりに数少ない史料を検討する中でその比定地を模索し、石田殿の立地を明らかにしたいと考える。そうすることによって石

田殿からの眺望景観も自ずと明らかになるものと考え。

2. 石田殿の伝領と関連人物

前記の引用文に続いて、同じく『今鏡』（「ふちなみの上」）の中に石田殿に関連する記述がある。

「大僧正のまだわかくをはしける時。御は、贈二位の。うち殿に。僧都の御房のまだわが房もたせ給はで。あひずみにてをはしまするに。房をさたしてたてまつらせ給へかしと申されければ。やすのりの民部卿。近江守なりけるに。まいりたりけるひ。こゝなる小僧の房をいまだもたざるに。草庵ひとつむすびてとらせられなんやとおほせられければ。つくり侍らん。いとやすきことに侍。やすのりがたちにつかうまつるいしだと申家こそ寺もちかくて。おはしまさんにもつれ へ なくなぐさみぬべき所はさぶらへ。堂なども侍て。便よきところなりと申ければ。殿は。ゆゝしきほうありける小僧かな。それはこよなきことにこそあらめとて。すゑたてまつり給へけるとぞ。」¹⁾

すなわち石田殿は民部卿やすのり（泰憲）が近江守在任中に構えた居館であったが、後にうち（宇治）殿の息子の僧侶に譲渡されたという。民部卿泰憲というのは藤原泰憲、宇治殿嫡男の僧は覚圓のことである。

藤原泰憲は寛弘4（1007）年に出生し、長久5（1044）年民部権大夫に着任、翌年近江守を兼務し、天喜2（1054）年に一旦近江守を退任した後、康平7（1064）年近江権介、延久4（1072）年近江権守兼務、そして亡くなる前年の承暦4（1080）年に民部卿に任じられていることが、『公卿補任』²⁾の記載から知ることができる。『尊卑分脈』³⁾によると藤原房前・良門につながる藤原北家の末裔であり、

* 奈良国立文化財研究所

藤原頼通とは同系譜に属する。長久5(1044)～天喜2(1054)年の最初の近江守在任中に従四位上に、延久5(1073)年には正二位にまで叙せられている。

一方覚圓は、『尊卑分脈』³⁾には父藤原頼通 母因幡守種成女(祇子)と記し、承徳2(1098)年に68歳で亡くなったとあるから、長元4(1031)～5(1032)年頃に誕生したことがわかる。橘俊綱は後に橘俊遠の養子となり、橘姓を名乗るが、実父は藤原頼通であり、覚圓は橘俊綱の実弟にあたる⁴⁾。覚圓は『寺門伝記補録』第13⁵⁾によれば、若くして園城寺に入り、天喜1(1053)年、22歳にして三部大法職を受けた後、康平6(1063)年に園城寺長吏、僧正、同7(1064)年に大僧正となり、承保4(1077)年には天台座主にまでなった人である⁶⁾。宇治平等院との関係も深く、康平7(1064)年に宇治平等院執印となっている。

『帥記』永保1(1081)年6月22日条には覚圓の御房である宇治実相房に関する詳しい記述があり、平等院に近い水辺に臨んだ清涼な位置に御房を構えていたらしい。

「永保元年六月廿二日、丁丑、日来為訪實相房欲向宇治……参會僧正御房、談泉邊清涼由」⁷⁾

この実相房と同一か否かは不明であるが、『中右記』嘉保2(1095)年2月5日条に覚圓の房として泉殿の名が見える。

「……已刻許過宇治間、聞大殿御之由、参泉殿、前大僧正房也……」⁸⁾

覚圓は、承暦1(1077)年12月18日には、白河上皇の京都法勝寺御幸に際して法勝寺別当となり⁹⁾、寺の西側に白川御所を設けている。この京都白川の法勝寺御所は『中右記』の中に散見される。

「嘉保二年五月十日 今夜女院令参籠法勝寺圓堂給……上皇同渡御法勝寺御所 前大僧正覚圓坊也、本為御所、御寺西別處、水石風流地也……廿一日、参入院白川御所、是宇治前大僧正房也、……」

このように覚圓は、宇治平等院、そして白河法勝寺の近辺にそれぞれ自房を所有しており、いずれも風光明媚な立地であったことがうかがえる。若き日に石田殿に居住した経験が、後に自房建設時の立地条件に対しても少なからず影響を与えたのではないだろうか¹⁰⁾。

さて、上記の『今鏡』の記載内容から、石田殿が覚圓に譲渡された時期には、泰憲は近江守在任中であり、しかも未だ自房をも持たない共同生活の若輩であったことがわかる。従って、泰憲が最初に近江守に着任した寛徳1(1044)年から、覚圓が大法職を受ける天喜1(1053)年までの間に、石田殿は泰憲から覚圓の手に移ったものとみられる。

石田殿に関する事項は『古事談』第六にもみられ、自然の景勝地を選んで造営された別業で、覚圓に譲られた後は、園城寺平等院の所領となったようである。

「石田殿ハ泰憲民部卿近江任之時。撰勝地所構造之別

庄也。而宇治殿仰云。子息少僧在園城寺。可然者坊舎一可求出云々。依之以石田之別業。奉覚圓僧正之後。為園城寺平等院等領云々。」¹¹⁾

このように、石田殿に関する記事は極めて少なく、規模や構造に至っては皆目推知することができない。

3. 石田殿の比定地

さて従来この石田殿の比定地に挙げられてきた地域が3つある(図-1)。

- 1) 山城國石田
- 2) 近江國坂田郡石田
- 3) 近江國園城寺近辺

図-1 4つの石田殿比定地

このうち山城國石田は宇治郡小栗栖郷と久世郡那羅郷の2箇所にそれぞれ存在し、都合4地点について以下に順次比定地として可能性を分析することとする。

1) 山城國石田

宇治郡小栗栖郷石田は現在京都市伏見区に属する。宇治木幡から山科川沿いに醍醐方面に向かう途上にあり、藤原氏が本拠とした宇治にも近く、墓所も存在する所である。従って、泰憲がこの地に居館を設けたと考えても不自然ではない。時期はやや下るが、『八坂神社記録(祇園執行日記)』貞和6(1350)年10月6日条に次のような記載があり、この地にとりわけ見るべき庭園が遺存していたことを知る。

「六日、越醍醐始巡禮了 三寶院山庄菩提寺一見了、参詣日野薬師堂、外山一見、行石田山水一見、及晩之間、

図-2 『八坂神社日記』に記すコース

四郎許ニ一宿了、

七日、自石田歸了、深草越也」¹²⁾

10月6日は醍醐寺三寶院から日野菜師に参詣し、東方の外山を巡覽して石田へと至るコースが採られている(図-2)。石田の山水を見て、その晩は四郎という人物の家に一泊し、翌7日に深草を越えて京都へ帰ったというから、この石田は宇治郡小栗栖郷の石田に間違いないであろう。当時小栗栖郷石田にはあえて訪問するほどの庭園が存在したのである。¹³⁾

一方、久世郡那羅郷石田は木津川の左岸に位置し、後に木津川以南が綴喜郡に編入され、現在は行政区画の再編によって八幡市岩田となっている。久世郡那羅郷石田には、後世庭園の存在したことを示す記録は認められない(図-3)。

山城國に存在した石田は、この2者である。しかしながら、この2つの石田を即藤原泰憲の石田殿と関連づけるのは問題があろう。その理由として、宇治郡小栗栖郷、久世郡那羅郷ともに、平安時代以来石田の領有権が細分化されていたことと、集落名の石田は当時「いしだ」と呼称されるものではなかったことの2点を挙げることができる。

まず最初に石田の領有権について見てみよう。

『東大寺統要録』諸院篇には、「尊勝院根本所領員数」として、康保4(967)年に大仏殿常燈料などに充てるために、大和國、山城國の34ヶ庄の莊園を、東大寺尊勝院に施入したとある。この中に山城國久世郡石田庄の名が

図-3 山城國久世郡岩田付近地形図

見える(図-3)。

「尊勝院根本所領員数

大和國

……

山城國

……

久世郡

石田庄

右件田地限日月奉施入於東大寺尊勝院如件以其年輸地利宛用大佛殿常燈一備并當院常燈佛供造佛寫經百部法花八講傳法會料修理作料供僧住僧等隨分供料若後代邪見之輩破此願妨此田地者梵王帝釈四大天王閻魔獄卒五道冥官勸請大菩薩大明神等國內普天一切神祇冥道令蒙破滅三寶之災禍給……

康保四年七月三日

……」¹⁴⁾

これらの莊園は一定の期間を限って施入したとあるから、後に寺領の返還が行なわれたのかもしれないが、若し妨害する者があれば梵王帝釈四大天王閻魔、獄卒、五道冥官は、大菩薩大明神等の國內の一切の神祇冥道を勸請して、三寶を破滅するの災禍を蒙ら令め給と厳しく戒めている。

また嘉保1(1094)年、強盜、放火、殺人罪に問われた散位大江公仲が隠岐国に配流となったが、嘉保2(1095)年1月10日に提出された彼の財産処分に関する目録「大江仲子解文」¹⁵⁾の中にも山城國石田の名が見える。この石田は宇治郡か久世郡かは不明である。

「處分目録

一 坊城地壹町 在左京四條一坊二町

……

……

一 石田 在山城國

件所先祖相傳所領也、隨□一先人故伊州所宛給曾孫持々丸也、不可改易矣

……

以前處分大略如右、公仲遠行之間、若有横妨者、早可訴申右馬頭殿也……

嘉保二年正月十日 大江 在判」¹⁵⁾

配流中、先祖より相伝してきた坊城地以下の所領を、他人の横領、妨害から守るための願文で、山城國石田の所領は「先人故伊州(伊勢守)」が曾孫持々丸に与えたものであり、もし横暴な者があれば右馬頭(藤原兼実)に申し出るよう定めている。

これと内容をまったく同じくし、奥書に「右、件文章者、橘廣房之處分也」と記すいまひとつの文書がある。¹⁶⁾この文書では、「大江仲子解文」の後段の部分が欠文となっており、なぜ同一文書を後に橘廣房が願い出ているのかなど不明な点が多い。橘廣房は橘俊綱の傍系子孫にあ

たり、後に大江匡房の養子となった後、天永2(1111)年に本姓に返った人物である。¹⁷⁾廣房の子以綱は大江公仲の養子となったが、後に公仲の実子として出生した女子大江仲子との間に所領の相続をめぐる相論が起き、解文に見られるように院庁へ裁断を求めることになったものらしい。遠州守大江公資、伊勢守大江廣経と伝領されてきた所領の保護を廣房が代わって願い出たものとみられるが、廣房が天永2(1111)年に本姓に復した後は、そのまま橘氏所領となったのであろうか。

これ以外に明らかに山城國宇治郡小栗栖郷と判明する石田は、勸修寺領、醍醐寺領となっていたことが、次の文書によってわかる。

「醍醐寺牒案 三寶院文書 康保1(964)年12月13日」¹⁸⁾

「山城國勸修寺領田畠檢注帳案 勸修寺文書 保元3(1158)年5月10日」¹⁹⁾

「山城國醍醐寺領坪付案 醍醐雜事記三 保元3(1158)年8月」²⁰⁾

「左少将某處分状案 九條家文書 承安2(1172)年2月28日」²¹⁾

勸修寺、醍醐寺は宇治郡小栗栖郷石田の北に隣接しており、この周辺域に寺領が存在していたことがわかる。

以上のように、山城國石田は宇治郡だけでなく久世郡にも存在し、いずれも東大寺、勸修寺、醍醐寺等の寺領や大江氏の所領として、田地の領有権は細分化されていたものとみられる。本来山莊経営に際しては、周辺の水田畠地をその経営財源に充てるのが原則であり、当時第一級の別業であった石田殿の経営に際しては、相当量の周辺所領を領有し、これを基盤としていたものとみられる。²²⁾このような莊園の細分化された土地では、大規模な別業の経営も思うにまかせなかったにちがいない。

次に石田の呼称のされ方についてふれよう。

平安時代、石田は宇治郡、久世郡ともに「いしだ」ではなく、「いはた」と訓読するのが習わしであった。先述のように、久世郡那羅郷石田は現在「岩田」と改変されており、集落の西北端に今も遺存する石田神社は、『延喜式』巻9²³⁾にも式内社としてその名が見えることから、平安時代初期から「いしだ」ではなく「いはた」と呼ばれていたことがうかがえる。一方、宇治郡小栗栖郷石田も、『万葉集』『詞花和歌集』によると同様に「いはた」と呼称されていたことがわかる。

「宇合郷謠三首

山科乃 石田社尔 布麻越者 蓋吾妹尔 直相鴨

山科の石田の社に布麻(ぬき)置かばけだし吾妹(わきも)に直(ただ)に逢はむかも(『万葉集』 巻2)」²⁴⁾

「山城のいはたのもりのいはずとも心の中をてらせ月かげ(藤原輔尹朝臣 『詞歌和歌集』)」²⁵⁾

「秋といへば岩田のをの、柞原時雨もまたず紅葉しにけ

図-4 近江國坂田郡石田付近地形図

り(覚盛法師 『千載和歌集』)²⁶⁾

「いはたの杜」「石田の杜」は、『山城名勝志』巻第17には「石田森 石田村在下醍醐西南、森在村西横川東」²⁷⁾、『山州名跡志』には「石田 在醍醐南五六町 石田杜 或岩田 在同所民戸西半町許 境地平林東西半町餘。南北一町許」²⁸⁾と記し、宇治郡小栗栖郷石田の西方約120mの横川沿いに存在したらしい。横川とは、『山城名勝志』巻第17に「横河 横河自北山科流出而經勸修寺東醍醐西木幡西而流合宇治川末也」²⁷⁾とあるから、現在の山科川のことである。おそらく「石田森」「石田杜」は現在の伏見区石田森東、西、南、北町のあたりに存在したものと思われる。従って『今鏡』に記す「いしだ」殿は、呼称のされ方の点からも山城國宇治郡小栗栖郷石田でも山城國久世郡羅郷石田でもないことが首肯できよう。

また、前記の『今鏡』の記述から、石田殿は園城寺近傍に存在したことが想像されるが、山城國石田は宇治郡、久世郡を問わずかなりの遠隔地である。

従って、これらの地を石田殿の存在した場所に比定するのはきわめて困難であるといわざるを得ない。

2) 近江國坂田郡石田村

近江國坂田郡の石田は現在の長浜市石田町に該当し、琵琶湖東岸から約5km東の山麓に位置する。この石田は管見のおよぶ範囲では平安時代の文献中に認めることはできない。集落内には石田三成生誕地と記す石碑も存在し、集落名の石田は石田三成に因んだものとするのが通

説となっている²⁹⁾。園城寺とは琵琶湖をはさんで対岸に位置し、極めて遠隔地であるため、石田殿の比定地としての可能性は極めて低い³⁰⁾。しかし、藤原泰憲が近江守在任中に、この付近に所領を領有していたことをうかがわせる次のような記録がある。

「民部卿泰憲。建立常喜院。割家領近江國坂田庄。大和國嘉殿庄兩處。以附當院。」³¹⁾

これによると、常喜院は藤原泰憲が坂田郡内に所有していた領地を園城寺に寄進し、支院として建立したものらしい。この常喜院の名に因んで命名された常喜という集落が今も長浜市石田の西南方のほど近い位置に存在する。常喜院は享保4年の製作である『近江輿地誌略』³²⁾にも、恵光山常喜院名超寺(めいちょうじ)の名が見え、常喜村よりさらに南の名超(なこし)村³³⁾に位置したものであることがわかる(図-4)。従って、石田、常喜、名超を含めたこの地域が、平安時代後半期に藤原泰憲の所領であったことは充分考えてよい。しかし、平安時代の文献中に「石田」の名を見出すことができないことや、当時長浜から大津浦までの舟便が開設されていたとはいえ、かなりの遠隔地に位置するということから、坂田郡石田を石田殿の比定地として考えるのは、極めて困難である。

3) 近江國園城寺北辺

『古事談』第6によれば、石田殿は後に園城寺平等院領となっている。この平等院とは、宇治平等院ではなく、

園城寺の平等院である。

「法務大僧正明尊 真言房千光院 二十二世
圓滿院

……圓滿院開祖。號志賀大僧正。……永承……七年
閏白藤頼通。於宇治別業造一寺。擬準三井平等
院。即號平等院。又請尊僧正任執印寺永為三井別
院。……康平……六年六月二十二日寂。年九十有
三。

前大僧正永圓 平等院元祖 二十三世
……天元四年出家入道。諱改悟圓。居明王院。後
創平等院。以在俗之子永圓為院主。號平等院大僧
正是也。寛弘五年二月二十六日。從智觀權僧正。
入壇灌頂于金堂。時内供奉。年二十九。……長久
五年五月二十二日入寂。年六十有五。」³⁴⁾

宇治平等院の草創は、『扶桑略記』³⁵⁾にもみられ、永承
7(1052)年3月28日に藤原頼通が別業を改めて寺とした
ことに端を発している。宇治平等院の名は三井平等院に
準じて擬せられたという。園城寺平等院の開祖は、永圓
大僧正で、『寺門伝記補録』第13の記述の文脈から推し
て天元4(981)年～寛弘5(1008)年に造営されたもの
と思われる。

これとは別に、圓滿院は大僧正明尊の開基になるもの
で、『春記』長久1(1040)年12月13日条の供養に関する
記録がその初見である³⁶⁾『寺門伝記補録』第13には「長
久元年 敕置阿闍梨五口于圓滿院。是依尊之奏也。」と
ある。永承7(1052)年以降『寺門伝記補録』には園城寺

平等院の名は登場しないから、おそらく園城寺平等院は
宇治平等院の造寺に伴って、圓滿院に併呑されたのでは
ないかと思われる。園城寺境内に存在した子院群は北院、
中院、南院の3区画に分けられるが、圓滿院は園城寺金
堂の北側の一面を占める北院の領域に存在し、『近江興
地誌略』には勸学院の建物を後に圓滿院としたとある。³⁷⁾
現在の圓滿院は円山応挙の襖絵の存在することから、天
明(1781～1788)年間の頃の修造とみるのが有力である。

ところで、平安時代後半期における平等院をも含めた
園城寺領の分布については、一部『寺門伝記補録』に散
見されるものの、全容を明らかにし得ない。14世紀中葉
の成立とされる『園城寺伝記』第6には、貞観10(868)
年頃の園城寺四至の概略を次のように記す。

「東限海棹立。南限南下路金塚南邊下路。西限界堺峯。
北限新羅明神現在谷山越道并下陌。

石。寺家所領地之四至。

……

貞観十年三月十七日……」³⁸⁾

新羅明神(新羅善神堂)は園城寺の鎮守神で、現在の
大津市役所の北側に位置する。現在谷は、『寺門伝記補
録』等1に「社頭北。後林中有深溪。松栢挾岸而生。奇
石臨流而疊。活水游戯東入大湖。無塵之境。……是三井
隨一勝境也。」と記し、新羅社北側の東方に開けた谷筋
であった。この新羅社北側の谷筋付近は9世紀中葉には
園城寺の北限を為していたのである(図-5)。

下って16世紀末の寺領については、慶長3(1598)年の
『三井寺領地目録』によって知ることができる。

「江州志賀郡三井領之事

一、七百五拾四石八斗八升	五 別 所
一、八百貳拾貳石六斗二升	山 上 村
一、九百六拾六石七斗五升	錦 織 村
一、八百九拾石	南 志 賀
一、五百四拾貳石七斗五升	藤 尾 村
一、百八石八斗五升	関 寺 町 屋 敷

……

一、拾七石貳斗	音 羽
一、貳百貳石四斗三升	志 賀 見 世 村

総以上四千三百貳拾七石八斗八升

……」³⁹⁾

これによると、16世紀末には園城寺近傍における寺領
は、五別所、山上、錦織、南志賀、藤尾、志賀見世など
の村落に存在し、概ね北は見世村から南は神出村まで広
がっていたらしい。

これらの2つの史料から、9世紀には現在谷以南の別
所村付近を北限としていた寺領は、16世紀にはさらに北
側へと拡大していることがわかる。この2史料の間には
約700年の時間差があり、寺領拡大の過程については不
明だが、今のところそれぞれの時代の指標としておく以

図-5 園城寺北郊における石田殿推定地

图—6 園城寺近辺地形図

図一七 『元徳二年三月日吉社并叡山行幸記』に記すコース

0 1 2 3 Km

外に方法はない（図一五、六）。

さて、上記の16世紀の寺領の中に見える錦織と、石田殿との位置関係を示す注目すべき記録がある。『元徳二年三月日吉社并叡山行幸記』には次のように記す。

「京都の貴賤上下。冷泉萬里小路より三條河原粟田口邊にいたるまで。見物車棧敷のかまへありともみえず。松坂絵岡をこえ。……鴨長明が述懐せし外山はるかにみえわたり。……けさは霞める羽音山山科如意山安祥寺。

……關の明神のすぎむらは神の代かけてかすみつつ。恵心僧都の再興して梵字あらたになせる關寺ちかく成給へば。うち出の濱大津浦。民のかまどもにぎはいて。ぬかづくをともあらはなり。當來導師の園城寺は教待和尚の故跡とか。……石田殿尾花井をすぎて錦織の浦にいで給へば。湖光渺瀰として山色陸離たり。雲の波烟のなみいとふかきところに。龍頭鷁首ともなひて音楽を奏しける。極楽浄土にはあらねども。八功德池にことならず。浦路

はるかにこぎゆけば。波常楽のしらべをそふ。……志賀辛崎になりぬれば。……」⁴⁰⁾

この記録は、元徳2(1330)年3月後醍醐天皇が、比叡山に行幸した時の記録であるが、14世紀にも石田殿はなお存続していたことを示す史料として重要である。京都を出て山科、逢坂関を越えて大津に入り、石田殿、尾花井を経て錦織の浦、志賀辛崎(唐崎)へ至ったと記す(図-7)。尾花井は所在地不明であるが、滋賀郡大津町の北端に尾花川町があり、おそらくこの近辺を指すのであろう。現在の錦織は琵琶湖西岸から約500 mの地点に存在するが、上記の引用文の「錦織の浦」が示すように、14世紀には琵琶湖の水面は錦織の集落の東辺まで広がっていたのではないだろうか。上述の経路を地図の上でたどると、石田殿は園城寺の北側に接して存在したことがうかがわれる。先述のように9世紀の寺領の北限は、現在谷と尾花川を結ぶ線上にほぼ比定できるから、石田殿はこの境界に北接して位置していたのではないだろうか。『古事談』第6の記載に示す如く、北院の一画に存在する圓滿院(平等院)の領有地となった点からも、この位置関係は妥当である。

明治15(1882)年の編纂になる『近江國滋賀郡誌』⁴¹⁾には別所、山上、錦織村内の字名を記すが、この中に「石田」の名は見えない。従って「石田殿」の名は郷名や庄名に由来するものではなかったものとみられる⁴²⁾

ところで、石田殿の名が見える文献がいまひとつある。それは『梁塵秘抄』である。『梁塵秘抄』は、嘉応1(1169)～治承3(1179)年頃後白河法皇による製作とされるが、巻第2の中で近江國の名所を列挙し、この中に石田殿を挙げている。

「これより東は何とかや、關山關寺大津の三井の嵐、山嵐、石田殿、栗津石山國分や瀬田の橋、千の松原竹生島」⁴³⁾

ここに謡い込まれている10か所の名所は、ほぼ4つのグループに分けることが可能である。

- ① 關山、關寺、大津三井
- ② 石田殿
- ③ 栗津、石山、國分、瀬田の橋
- ④ 千の松原、竹生島

①の關山とは逢坂関の存在する逢坂山、關寺は逢坂山麓にあった寺、⁴⁴⁾ 大津の三井はいうまでもなく園城寺である。③の栗津は瀬田川の右岸に位置し、石山は石山寺、國分は國分金光明寺、瀬田の橋とは瀬田川にかかる長橋を指す。そして④の千の松原とは彦根近辺、竹生島は周知のとおり湖北地方の湖上に浮かぶ小島である。この①～④のグループは、京都から近江への玄関口である逢坂関を起点として、琵琶湖岸をほぼ反時計まわりに順序が定められているといえる。これを図示したものが図-8である。山城國石田や近江國坂田郡石田はこの記述のコ

ースを明らかに逸脱するものだといえよう。この順路にのっとって石田殿の比定地を求めるとするならば、關山、關寺、大津三井の以北に求められるべきであろう。『梁塵秘抄』は、逢坂関を出発点とし、一旦琵琶湖西岸を北上し、再び湖南にもどって、今度は東岸を彦根、竹生島まで至るコースをとっているからである。

以上のように、石田殿が後に宇治平等院ではなく、園城寺平等院領となっており、『元徳二年三月日吉社并叡山行幸記』の記載から、園城寺の北側、錦織村までの区間に所在した可能性は極めて高い。そしてこの地点は、『梁塵秘抄』の記述順序にも合致し、しかも山城國、近江國坂田郡の石田に比して園城寺にも極めて近距離に位置しているのである。

4. 石田殿における眺望景観

次に前節で見た4つの比定地における眺望景観について考察してみよう。図2, 3, 4, 6, 写真1, 2, 3, 5は4地点の地形図と現在の眺望景観である。

まず山城國宇治郡小栗栖郷石田の場合、醍醐と小栗栖の山脈にはさまれた谷地形を為し、山科川沿いの盆地景観が展開する。また山城國久世郡羅郷石田では、北側に盆地の広がる平らな景観である。近江國坂田郡石田も、東側に伊吹山を擁し、平明な平野の開けた立地である。3者は全く異なる景観を呈しているが、地形・眺望という点ではいまひとつもの足りないといわざるを得ない。

これに対し、近江國園城寺北郊は西側の比叡・比良の鋭峰から東の琵琶湖に向けて扇状地が開け、立地条件は前2者に比して明らかに優れているといえよう。琵琶湖を望む景観は当時の人間にもかなり感動的であったとみえ、関白藤原師通が比叡山を訪れた時の記録には「東湖

図-8 『梁塵秘抄』に記す近江名所

写真—1 山城國宇治郡石田付近の景観

写真—2 山城國久世郡岩田付近の景観

写真—3 近江國坂田郡石田の集落から伊吹山を望む

写真—4 園城寺観音堂(正法寺推定地)からの眺望

眺望 興味無極」⁴⁵⁾とあって、はるかな水面への憧憬の念を表現している。同様の記述は寛治6(1092)年3月26日の園城寺羅惹院の供養に関する『寺門高僧記』の記録にも見え、「東望有萬里波浪、心馳松江柳湖之春風、西顧、有千峰之煙嵐、眼迷雲蓬露萊之時月(日)……」とある。⁴⁶⁾

また時代は下るが『近江輿地誌略』には園城寺内の10か所を選定して十境とし、この中に「正法眺望」という文字がみられる。

「三井十境

金堂白櫻。新羅夕蟬。亀岳暁霜。唐院夜雨。

筒井喬松。護法。琴谷冷螢。龍池寒月。

靈輻古鍾。正法眺望」³⁷⁾

正法寺は園城寺の南端、現在の観音堂の位置にあたり、ここからの景観は南は天津浦、北は堅田までの琵琶湖の西湖岸線はもとより、はるか湖東の三上山をも含めて雄大な眺望に優れている(写真—4)。

こうした眺望を生かした庭園が、現在の園城寺内にも遺存する。享保年間ではあるが、園城寺別院として再建された法明院である。『近江輿地誌略』(享保年間(1781—1788)製作)によれば、法明院は、

「三井の支院として其名昔よりあれども、中古断絶しぬ。然るに近頃義瑞和尚建立也」³⁷⁾

と記し、18世紀に再建されたい。『園城寺法明精舎十勝記』⁴⁷⁾にも十勝を記し、「時雨亭」という建物の存在したことを知る。法明院は園城寺の北方、新羅善神堂西方の谷筋にあり、前節でふれた9世紀園城寺領の北端にあたる部分に位置する。これは奇しくも石田殿推定地とほぼ同じ位置である。現在の法明院は一段下がったテラスに中島を擁する園池があり、ここからは東方に琵琶湖と湖東の連山を一望の下にみはるかすことが可能である(写真—6, 7)。

以上のように鋭峰に抱かれ、はるかな湖水を望む雄大な眺望景観は古くから人間の感興をそそるものとして注目されていたのである。園城寺北郊における眺望景観はまさにこれと共通しており、山城國宇治郡小栗栖郷石田、山城國久世郡那羅郷石田、近江國坂田郡石田における景観を圧倒しているといえよう。

5. まとめ

この小論では、従来、史料的な制約から幻の館として扱われてきた石田殿を取りあげ、その比定地の模索と、そこにおける眺望景観に関する考察を行なった。

史料の上からも、実際の眺望景観の点からも近江國園城寺北郊の地が石田殿比定地の最有力候補として位置づけられる。とりわけ、これまで庭園史上注目されることのなかった『元徳二年三月日吉社并観山行幸記』⁴⁰⁾の中に石田殿の所在地を推定させる記述を見出したことは

写真—5 大津市役所付近から琵琶湖と三上山を望む

写真—6 法明院庭園(樹間から琵琶湖を望む)

写真—7 法明院東端より琵琶湖を望む

特筆に値する。そして、この推定所在地からは琵琶湖をはるかにみわたすことができ、橋俊綱によって当時第一級と推奨された石田殿は、山懷に位置し広大な水面に臨むという極めて優れた立地条件を持っていたことがうかがわれる。

なお、冒頭でふれた『今鏡』¹⁾では、俊綱は石田殿以外に高陽院、伏見亭、宇治平等院などを名園、名館として挙げており、鳥羽殿はその選に漏れている。これらの事例と石田殿との比較検討ならびに鳥羽殿を何故退けたのかなどの問題については後日を期して論じたいと考える。本稿を草するにあたり、奈良国立文化財研究所史料調査室の館野和己氏の助言を得た。負うところを記し、厚く謝意を表したい。

註および引用文献

- 1) 今鏡：新訂増補国史大系21下，吉川弘文館，1965
- 2) 公卿補任1：新訂増補国史大系，吉川弘文館，1965
- 3) 尊卑分脈1：新訂増補国史大系58，吉川弘文館，1965
- 4) 橋俊綱誕生のいきさつについては久恒秀治『作庭記秘抄』（誠文堂新光社，1979）に詳しい。
- 5) 寺門伝記補録：大日本仏教全書

- 6) 天台座主記：比叡山延暦寺，1935
- 7) 帥記：増補史料大成5，臨川書店，1965
- 8) 中右記：増補史料大成9，臨川書店，1965
- 9) 『中右記』寛治7（1093）年1月14日条「前大僧正，覚圓，御寺別当」とある。（増補史料大成15）
- 10) これ以外に嘉保1（1094）年8月10日条には「大殿（藤原師實），并北政所，左大将（忠實），御座三井寺前大僧正房也」とあるが，この房が宇治であるのか白川であるのかは不明である。
- 11) 古事談：新訂増補国史大系18，吉川弘文館，1965
- 12) 八坂神社記録（祇園執行日記）：八坂神社，1923
- 13) 森蘊「寝殿造系庭園の立地的考察」（奈良国立文化財研究所学報第13冊，1962）では，注目すべき史料として文献12を採りあげている。
- 14) 東大寺統要録 諸院篇：東大寺所蔵
- 15) 平安遺文 1338号，竹内理三，東京堂出版，1964
- 16) 平安遺文 1761号
- 17) 尊卑分脈4：新訂増補国史大系60下，1965
- 18) 平安遺文 283号
- 19) 平安遺文 2922号
- 20) 平安遺文 2943—2945号
- 21) 平安遺文 補117号

- 22) 藤原頼通が宇治平等院の経営に際して、周辺の庄園の多くを寺領に施入し、藤原氏と外戚関係のなかった後三條天皇と激しく対立する一因ともなったことは有名である。
 - 23) 延喜式：新訂増補国史大系26, 吉川弘文館, 1937『延喜式』巻9 神祇9 神名の項には、「久世郡二十四座 大十一座 小十三座」の第一番目に「石田神社大。月次新嘗」とある。
 - 24) 万葉集2：日本古典文学大系5, 岩波書店, 1959
 - 25) 詞花和歌集：国歌大観, 中文館書店, 1942
 - 26) 千載和歌集：国歌大観
 - 27) 山城名勝志：京都叢書8, 京都叢書刊行会, 1935
 - 28) 山州名跡志：京都叢書20, 京都叢書刊行会, 1935
 - 29) 角川日本地名大辞典25 滋賀県：角川書店, 1979
 - 30) 日本古典文学大系73 (梁塵秘抄) には、石田殿推定地を「坂田郡石田か」とする。
 - 31) 寺門伝記補録 第13
 - 32) 近江輿地誌略 巻79：大日本地誌大系26, 雄山閣, 1930
 - 33) 現在は長浜市名越町である。
 - 34) 寺門伝記補録 第13
 - 35) 扶桑略記 第29：国史大系6
 - 36) 春記 長久1 (1040)年12月13日条「今日於三井寺有御堂供養事, 供御堂大僧正明尊所奉行也, 以彼住房稱御願堂, 號圓滿院」(増補史料大成7, 臨川書店, 1965)
 - 37) 近江輿地誌略 巻13
 - 38) 園城寺伝記：大日本仏教全書 寺誌叢書
 - 39) 三井寺領地目録：大日本仏教全書 寺誌叢書, 鈴木学術財団, 1971
 - 40) 元徳二年三月日吉社并叡山行幸記：群書類従3, 群書類従完成会, 1965
 - 41) 近江國滋賀郡誌：弘文堂, 1979
園城寺領北端の見世村のさらに北側は赤塚村で、明治15(1882)年の編纂になる『近江國滋賀郡誌』には、赤塚村所属小字名6ヶ所の第4番目に「石田 本村西部山麓ニアリ東西壹町四拾零間南北五拾零間」と記す。赤塚村の管轄沿革には「延暦寺創建ヨリ其寺領ニ属ス元龜二年辛未織田信長之ヲ討伐シ寺領ヲ褫ヒ明智光秀提封トス (古文書存セス村人口碑ニ依ル)」とあって、もともと延暦寺領であったことが村人にいい伝えられていたという。石田殿とは直接関係がないが、園城寺北郊に見受けられる唯一の「石田」ではある。
 - 42) 久恒秀治氏はすでに前掲書で大津錦織を石田殿比定地に掲げている。これは石田殿比定地を園城寺北郊に求めたという点で真に卓見といわねばならないが、その論拠とするところは、錦織に「御所ノ内」という字名が遺存しているということである。氏も認めるように、昭和3 (1928)年以降の発掘調査によって、この地に天智天皇6 (667) 年の近江大津宮の遺構が次々と確認され、「御所ノ内」は大津古宮に由来する字名であることは確実となった。従って、「御所ノ内」を石田殿に由来する字名とし、これを論拠に当該地を石田殿の比定地とすることには問題がある(図-5)。『元徳二年三月日吉社 叡山行幸記』によると、後醍醐天皇は園城寺から 上するコースをとっているため、石田殿は「尾花井」から「錦織」に至る区間の、園城寺に北接した地点に求められるべきである。
 - 43) 梁塵秘抄：日本古典文学大系73, 岩波書店, 1965
 - 44) 世喜寺ともいう。現在の園城寺の南方約600～800mに位置する「高観音」付近に存在したとされる。
 - 45) 後二條師通記：寛治6 (1092)年1月11日条, 大日本古記録, 岩波書店
 - 46) 寺門高僧記：統群書類従28, 統群書類従完成会, 1965
 - 47) 園城寺法明精舎十勝記：大日本仏教全書 天台霞標, 1971
- なお、本稿で使用した地形図はすべて明治42年大日本陸地測量部製作で、図-6が1/20,000, それ以外は1/50,000の縮尺である。
- (1987.3.14 受付, 1987.11.13 受理)

Summary: Ishida-dono; the villa residence which was constructed in 11th century, had the best prospect in accordance with the statements of Toshitsuna-TACHIBANA who was the chief of the construction department in 11th century.

But the traditional studies could not prove only the structures and gardens but also the position of Ishida-dono.

This study has estimated the position of Ishida-dono by the range over an extensive literature. And it has led to the conclusion that Ishida-dono stood at the west coast of Biwa-Lake and commanded a view of the great surface of the water.